

いまのこどもの姿と将来の姿のイメージ ④

園長 片山喜章

寒さ厳しき折、園内には「生活発表会」に向けて、熱い空気が広がっています。

お稽古の場面を見たり、実際に関わっていると、不思議だなあ、と実感する事があります。ふだん思い思いの遊びをしている彼らが、いざ劇となると嫌でもその場にじっとしているからです。

どの園でも見られるごくふつうの幼児の姿ですが、このふつうの姿は、どうして引き出されるのでしょうか。そのルーツや意味を深く掘り下げて考えると俄然、不思議に感じるのです。

ひとり1人が、思い思いに、あるいは群れて遊ぶ自然な楽しさと違って、劇や器楽は、決まったテーマを興味があってもなくても、みんないっしょを強いられる少しシンドイ活動です。この種の経験は、子どもの育ちにとって、どんな値打ちがあるのでしょうか。教育界では、子どもの学習意欲や理解力を高めるために一斉型の授業改革を模索しているところですが・・・。

人類は、種を繁栄させるために、協力し、情報を交換し、科学技術を発展させてきました。しかしその結果、現代は、人としてもともと宿している“つながり欲求”以上に、規則や規制によって、互いがつながれている息苦しさを感ずります。今の若者は、コミュニケーション能力に欠けるのではなくて、社会的規制とIT等による利便性がコミュニケーション能力を退化させている、そこに焦点を当てた教育観や社会観が必要であるというのが私見です。

子ども時代、豊かな遊び環境を保障して、その子らしい成長を支える。その一方で、規制や制約を嫌でも受け入れる社会性（免疫づくり）の育成は必要です。ふざけ好きな子も“みんないっしょ”の場面にある程度、なじめるのは適応力がもともと備わっているからだと思います。

みんなでいっしょにお稽古する経験は、社会性を育成するためのトレーニングの一種であるという解釈は、誤謬ではないと思われますが、昨今、適応できない子どもが増えてきているのは、この考え方に対する警鐘で、大規模にリセットして考える時期が到来した感があります。

一方、「発表会」の取り組みにおいて、法人で共通認識になっている考え方が2つあります。

1つは「出来映えや見栄えを良くして、お客さんにより楽しく“子どもの育ち”を観ていただく」ということです。かつて“過程が大事で見栄えはどうでもよい”といった論調が一世風靡した時代があります（今もそう語る園はあります）。それは、ガチガチビシビシの練習をすることは、良くないという“保育の良心”を表現したものだと思います。

しかし、私たちは、出来映え、見栄えとは、子どもではなくて、保育者集団のイメージの豊かさと創意工夫の問題であると考えています。保育者集団の創造性や柔軟性を高めることによって、出来映え、見栄えをよくしようと努力しているところです。

もう1つは、発表会において、題材選び～導入～台本作りを、より深く子どもたちと分かち合って、お稽古の進め方をより豊かにするために工夫することが、子ども（集団）の育ちを促すと考えています。なので、担任とともに職員集団（管理職総出）で、台本の構成の検討や練習の方法について、語り合いました。そういう意味では、子どもたちの発表会は、担任を中心にした保育者集団の創意と連携力の発表の場でも在るといえるでしょう。